

第201話 俳諧⑭ 俳諧歌枕と俳諧発句 その4 中山町 歴史散策

文新田の服部文右衛門家になぜ「俳諧歌枕」が残されたのかということについては、後書きにある「梨本甚蔵」なる人物が鍵となるようです。当時の長崎村・達磨寺村は、漆山代官所付の村で、宝暦3年（1753年）に米沢上杉藩預り地となっており、そういう由縁か、この梨本甚蔵は米沢藩士であるようで、彼が所有している「俳諧枕歌」と称する表題の書が、彼自身によって写し書きされたと思われる。句を書き連ねた最後尾に、柳且の名で一句記されています。虫の声も次第に遠き霜夜哉という句で、秋も盛りの頃の季節を読んだものと思われまふ。日付については、「宝暦五 九月」と記されています。この柳且の号は、何処の句、連歌にも見受けられないことから、あるいは梨本甚蔵その人の号かもしれません。

よりかり申し而うつし候、是は梨本甚蔵の書なり」とあるのは、梨本本を借りて服部家の手で写したとみるべきか、少しばかり判断に迷うところです。しかし、表紙から末尾まで同じ字体であることから、ひとりの手で写されたものに違いありません。この書は、果たしてどれほどの当地の俳人に親しまれたか、俳諧の開催記録は見当たりませんが、今後の資料の発見に期待したいところです。

このほか、もう一冊の俳諧手引書があります。30ページほどの「俳諧発句」なる句書が平成12年に石沢家に残された文書の中から発見されました。裏表紙には稚拙な字体で、蜻蛉やすすきをゆらすふり見せずの句と、「天明七末年 鈴木蝶宇蔵書」とあって、「此本いつ方へ来り候共此方江御かへし可被下候」の文字が見えます。

※引用 中山町史 中巻

第10章第3節

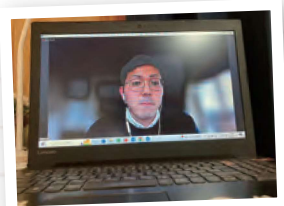
文芸と美術工芸

私たち地域おこし協力隊です！ No.67



みなさん、こんにちは！地域おこし協力隊の高橋です！
地域おこし協力隊としての活動も、ついに最後の一年となりました。本当にあっという間に感じます。

さて、先月3月13日（水）に総務省主催の地域おこし協力隊のオンライン研修がありました。その中で、スマホ教室やスマホよろず相談所の事例発表を行いました。全国から257名の参加者があり、これまでに経験したことのない大勢の方々と話すことになり、とても緊張しました。発表者側に回る機会が来るとは思っていませんでしたが、これも日々スマホ教室やスマホよろず相談所をご利用いただいている皆さまのおかげです。改めて本当にありがとうございます。



ただ、家の中で一人、パソコンに向かって話し続けるというのは慣れないものですね。とても便利なのですが、どこを見れば良いのか気にしすぎてしまい、視線があちらこちらにいつてしまったなど反省しています。今年度も引き続きスマホ教室やよろず相談所を開催しますので、初めての方もお気軽にご参加ください。



高橋 圭哉

出身地：宮城県岩沼市
趣味：けん玉、
アニメ鑑賞



●協力隊への問い合わせ先● 高橋 ☎662-2223（総務広報課）